

日本英語教育史学会 会報

280

2017 年 4 月 15 日

HiSELT Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

発行人 日本英語教育史学会 (代表: 江利川春雄)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 562

県立広島大学 庄原キャンパス 河村和也研究室

tel: 0824-74-1727 fax: 0824-74-0191

e-mail: membership@hiset.jp

会費納入口座 (名義人: 日本英語教育史学会)

ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873

三菱東京 UFJ 銀行千住中央支店【普通】0997182

学会公式ウェブサイト www.hiset.jp

第262回研究例会報告

2017 (平成 29) 年 3 月 18 日 (土), 真宗教化センター しんらん交流館 (京都市下京区) において第 262 回研究例会が開催されました。参加者は 16 名でした。

はじめに研究発表が行われ, 惟任泰裕氏 (神戸大学大学院) が「旧制実業専門学校の英語入学試験問題」というテーマでお話しされました。続いて川嶋正士氏 (日本大学) を指定討論者に迎え, 「自著を語る」として中村捷氏 (東北大学名誉教授) による「古きをたずね, 新しきを知る: 中村捷編著『名著で学ぶ これからの英語教育と教授法』を素材に」の発表が行われました。総合司会と研究発表司会は, 共に馬本勉氏 (県立広島大学) でした。以下に参加者の感想を掲載しますのでご参照ください (①は惟任氏, ②は中村氏及び川嶋氏の発表への感想です)。

◇ ◇ ◇

◆①しっかりと資料を踏まえて, 広汎な角度から分析されていますが, 例えば, 入学前に修得しておくべき英語力を験すための試験である入試として, どのような内容の, どのような程度の英語力を求めたのかなどの共通の, 一貫した比較の観点を設けて, 通時的に時代による異なりや変遷, 或いは, 共時的に高商と高等学校, 高工, 高等農林間の異同を比べるなど, 少し絞り込まれた方がよいのではないかと思います。拡散し過ぎるとそれを収束させるのは大変です。 (Dragon)

◆①旧制高校中心だった戦前期の英語入試問題の研究を, 実業専門学校にまで拡張した意義は大きいと思います。今日の大学では, どのような学生を入学させるかというアドミッション・ポリシー (AP) の明文化が求められています。旧制の実業専門学校 (農業・商業・工業など) でも, その校種の違いによって AP の違いがあったのかを, 英語入試問題の相互比較を

通じて明らかにできれば面白いと思いました。さらには, 旧制高校, 高等師範, 外国語学校, 陸海軍士官の学校などとの比較検討も課題になると思います。 (みかん舟)

◆①今年に入り, 1 月研究例会で指定討論者, 3 月研究例会で発表, 5 月全国大会でも発表を予定されていますね。絶えず口頭発表をすることで, 今後の研究の基礎ができると思います。発表を聞きながら古きものを遡ることで, 現代に問かけるものがあると感じました。この時代の入試問題を自分が解答したらどういう判定をもらうだろうかと空想しながら聞きました。若いうちは, 接するすべてが学問の肥やしとなります。視野を狭く限定した発表をするのは簡単ですが, それを続けると, 将来, 視野の狭い研究者になります。様々なトピックに触れて open-ended な可能性を秘めた発表を続ける時期だと思います。これからのますますの活躍に期待します。試験問題の難易度の調査が

難しいことは承知の上ですが、様々な統計的調査方法に基づいた実証に耐えうる研究ができるとよいでしょう。今後、様々な教育機関の試験問題の分析に発展されることを期待いたします。

(insulae flumen)

◆②御著書の概要に加え、それを基にこのような読み方をしてはどうかとの御提言を頂き、なるほどと思ひ乍らうかがいました。また、指定討論者による討論は本書を史的立場づけから評価して、そこから解釈を敷衍していく展開を興味深くお聞きしました。

(Dragon)

◆②英語教授法に関する古典的な名著のエッセンスを抽出し、詳細かつ的確なコメントを付けて現代に甦らせた中村先生の功績はたいへん大きいと思います。例会では、各教授法のポイントをさらに絞り込まれていましたので、それぞれの特徴がたいへんよく分かりました。それにしても、各著作は現在の英語教育に示唆を

与える実に多くの提言を行っていたのですね。まさに「古典」です。

(みかん舟)

◆②中村先生といえば、生成文法の core syntax の研究のイメージが強かったので学習英文法に造詣が深いことは驚きました。また、発音指導を通じた直読直界に基づく英語教育観はとても正鵠を得たものと感じました。ご編著の解説のいたるところに見られるコメントから、英語教育に対して科学者らしい客観的な視点から様々な提言をされているのが読み取れました。そのダイジェスト版ともいえる発表でも洞察に満ちた知見をたくさんいただきました。一つとして、完璧な教授法は存在しないことがよくわかりました。これからは、題材となった 4 書に触れながら各々が自分なりの咀嚼をしてより良い英語教授法を確立する使命があると感じました。

(insulae flumen)

< 発表を終えて >

今回、中村捷氏の編著を素材とした発表の指定討論者を務めさせていただきました。本書は、外山正一、岡倉由三郎、O.イエスペルセン、H.スウィートという 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて活躍した日本と海外の英語教育・英語学の大家が著した 4 冊の名著を紹介するものです。発表タイトルに「温故知新」と見られるように、これらは現代の教育に様々な知見を与えます。旧仮名遣いの和書を含む各書が現代日本語に訳され、わかりにくいところなどは、中村氏による補足、修正、例示等がなされています。また、章を結ぶたびに中村氏による解説が付されています。討論をするにあたりこれらを精読することにより、先人の示唆に富む様々な洞察と中村氏の現代的な視点からの解釈や提言に触れることができ、大いに刺激を受けました。

私は、主として日本と海外において 4 書が著された時代の背景を論じました。何かの Research Question を掘り下げるときに syntagmatic な軸から熱心に資料に触れる研究者は多いのですが、diachronic な軸からの先行研究の調査を怠り、研究に対して正しい理解がなされないように思える場合が多く感じ取られます。例えばイエスペルセンの著書が「英語」ではなく「外国語」の学習について述べるものであったのは、まだ古典語であるラテン語やギリシャ語が絶対的な地位を占めていた語学教育から、(例えば英国であれば) 現代外国語としてフランス語とドイツ語、さらに国語として英語が教えられる時代となり、語学教授のカリキュラムが大幅に変わりつつあったことや、

川嶋 正士 (日本大学)



スウィートの著書が音声学に力点を置いているのは、中世よりラテン語教授の基本となった規範文法の桎梏から脱却した科学文法が生まれ、規範文法をアカデミズムから駆逐しつつあった状況を理解して本書に接するとより深く正しい理解ができ、新たな **Research Question** が生まれるのではないかと考えたからです。研究例会当日に配布した資料でも、これらの背景を論じたのち 4 書の知見と現代的な研究の接点や問題点を検討しました。

4 書の射程はとても広く、指定討論者が異なったならば、音声学、教科書論など別の分野からの議論も活発に行われたことと思われまふ。本書を一読された方が、中村氏の発表を聞いた後再読する際に指定討論者の発表や資料に触れたことで何か新規な観点から考えを巡らせる一助になれば討論に臨んだ甲斐があると思ひます。

<発表を終えて>

中村 捷 (東北大学名誉教授)

古きをたずね、新しきを知る (温故知新) が主題の拙編書は、英語教育の名著 (外山正一『英語教授法 附正則文部省英語読本』, 岡倉由三郎『英語教育』, O. イェスペルセン『外国語教授法』, H. スウィート『言語の実際的研究』) を通して、碩学の言語観、教育観に基づく外国語教授の基本問題と外国語学習の基本問題を学び、具体的問題 (訳読、暗唱、音読、会話、語彙、文法、教師、英語教育を始める時期など) について、その基本問題を検討し若干の解説を加えたのであった。本書を通して、現在の混沌とした英語教育の現状の中で、教師一人一人が自分自身の教育観、言語観に基づく自己の教授法を改善、発展させるための示唆を得られること念じている次第である。

今回の発表に関しては、指定討論者である川嶋正士先生より、本書の内容に関して英語教育史的観点から適切な補足をしていただき、取り上げた著書の歴史的背景や位置づけがさらに明確になったと思ひます。記して感謝申し上げます。



<発表を終えて>

惟任 泰裕 (神戸大学大学院)

今回の例会では、「実業専門学校の英語入学試験問題」について、高等商業学校を中心に発表をさせて頂きました。発表にあたっては、私が復元をした試験問題や『官報』に掲載された募集要項、『受験と学生』という受験雑誌に掲載された記事などを用いております。これらの史料は、修士課程在学中から集めたり、分析をしたりしていたもので、ようやく発表にまでこぎ着けたという思ひでおります。発表をしてコメントを頂くなかで、思考が深まり、研究上の不備や課題に気づくことができ、発表をさせて頂けて本当に良かったと感じております。今後は、今回の発表内容をより良くして、論文にまとめていきたいと思ひます。またコーパスなどを用いた言語学的な分析ができていないことは、現段階では大きな弱点でありますので、これから勉強していきます。最後に、パワーポイントを使用しての発表は初めてのことで、ガチガ



ちに緊張し、お聞き苦しい点が多かったと反省しております。その発表を長時間にわたって聞いていただき、有益なコメントをくださった先生方に心よりお礼申し上げます。研究のみならず、発表方法につきましてもさらなる努力をして参りますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

出来先生の追悼文

会報 279 でお知らせしましたが、1 月 11 日に還浄された、本学会顧問で神奈川大学名誉教授の出来成訓先生へみなさまから寄せられた追悼文です。

出来成訓先生を偲んで

竹中 龍範

平成 29 (2017) 年 1 月 13 日、事務局長の河村先生から出来成訓先生ご逝去のメールが届きました。出来先生には長らく病気ご静養中のところ、1 月 11 日に幽明界を異にされました。ご冥福をお祈り申し上げます。

わが日本英語教育史学会が日本英語教育史研究会として発足したのは昭和 59 (1984) 年 12 月 8 日、拓殖大学茗荷谷校舎の教室に 50 名ばかりの人たちが集い、その創立総会を開いた時でした。この研究会創設に際して中心的役割を果たされたのが出来先生であったことは皆さますでにご存知のところですが、その動因となったのは、これを遡ること 3 年前、昭和 56 年 10 月に立正大学大崎校舎を会場に開催された日本英学史学会の全国大会でのシンポジウムにおいて、先生がフロアから問いかけられた「日本英学史の研究は明治のある時期までを限りとすべきであり、それより後の時代は日本英文学史研究、日本英語学史研究、日本英語教育史研究などに分化して行われるべきではないか」という趣旨のご発言であったと解釈しております。これは別のところにも書きましたが、先生がこれを否定されることはありませんでしたので、この解釈に誤りはないものと思っております。また、このことはこの創立総会において検討され、承認された「日本英語教育史研究会設立趣意書」を読んでみられれば、そこに「英学史研究のうち殊に英語教育の歴史に関心をもつ我々が、同学の士を集めて」と記されているところからも肯んじ得ようかと思えます。こうして発足した研究会を代表幹事として、さらには同研究会が日本英語教育史学会と改組改称されて後は会長として、長らくこれを牽引され、ご自身が研究発表を続けられる一方で会員にも発表を促され、創立当初よりしっかりと研究紀要の発行を支えられました。

いま学会ホームページに公開されている「日本英語教育史学会 20 年の歩み」を通覧して見ると、発足当初の研究例会ではその当時に中堅、重鎮であられた先生方の研究発表が続きますが、やがて若手会員による発表が増えてきたことが窺えます。これは学会が若手を育てようという姿勢を持っていたことを示すものですが、それは殊に出来先生のお考えが強く反映されたものではなかったかと思っております。ご自身が坪内逍遙や勝俣銓吉郎等を擁する日本英学史の一大拠点である早稲田大学をご卒業になられながら、英学史・英語教育史研究の方面では直系の弟子をお持ちになられなかったために、ご自身の研究を引き継がれる若手研究者を求められる、或いは若手研究者を大事にされるお気持ちによるものではなかったのでしょうか。

これについて、私には 2 つの大きな思い出があります。その一つは、先に触れた創立総会の場において設立趣意書を検討しているときのことでした。上に引用している部分で、「同学の士を集めて」というところは原案では「同好の士を集めて」となっていたのですが、この表現について、こ

の場に参加の最若手の一人であった私が生意気にも「やはり研究者の集まりですので、『同好の士』よりは『同学の士』の方がふさわしいのではないのでしょうか。これではまるで好事家の集まりのような印象を持たれますので。」と申し上げたところ、出来先生がすんなりと受け入れて下さり、若造の妄言とばかりに切り捨てられることはありませんでした。その後も何かにつけ親しく接して下され、なかなか研究発表をしない懶惰理事を気長にお見守り下さいました。

もう一つの思い出は、私が会長を引き受けることを遅疑逡巡していたときの先生のお一言でした。「毎月、例会のために上京するのは経済的にも負担になるだろうから、例会はわれわれ東京のほうで引き受ける。全国大会と役員会だけ出て貰えばよい。」とまで仰って下さったにも拘わらず、なかなか Yes と言わない私に、少し強い口調で「竹中さん、ものには順序というものがあるんだ。あなたにはやって貰わねばならないんだよ。」との最後通牒を發されました。腹を決めて、「分かりました。恩返しをせねばならないという気持ちはありますので。」とお答えしたのが研究例会前の数分間のやりとりでした。その後は、お年とご体調のほうで無理を押しながらも例会にご参加下され、後の懇親会にもお付き合いいたいて、われわれ若手の精神的支柱として安心感を与えて下さいました。

最晩年は、ご病気によって外出を控えられていたようですが、お見舞いにも伺えないままにこうしてお送りすることになってしまいました。ご葬儀に伺えたのがせめてもの報恩となりました。今は御霊安かれとお祈り申し上げるばかりです。合掌。

先生は私たちの憧れでした

小篠 敏明

出来先生、先生は私たちの希望であり、憧れであり、目標でした。

先生は私のような、駆け出しにも優しく接して下さり、私のつたない研究をも温かく見守って下さいました。先生の前では、私は気が付かないうちに先生の教え子のような気持ちになっていたように思います。学問に秀でた人は得てして他の研究者に対しても厳しい傾向にあるように思いますが、先生はご自分には厳しく、他の研究者には優しく、であったというのが私の印象です。そして、これはおそらく多くの会員の皆さんの印象でもあったのではないかと思います。これこそがこの学会に多くの会員をあつめた本当の理由ではなかったかと思わずにはいられません。

先生との思い出で忘れられないことがあります。それは東広島で全国学会を開催した時のことです。当時は私もまだ若く、生意気な若造でした。(今でもその気は抜けきっていないような気もしますが。) 懇親会の席で私は先生に飲み比べを挑み、その夜はふたりで徹底的の飲み上げたのですが、私の方が先に前後不覚に陥ってしまい、翌朝、目が覚めたら、(懇親会と同じ) ホテルの部屋のベッドで服も着替えず、ドアのロックもせず、横になっていました。

朝食の席で顔を合わせたら、先生はいつもと変わらぬおだやかな表情で、静かに食事をしていらっしゃいました。目が合うと先生はいつもの優しい笑顔で「よく眠れましたか」とお尋ねになりました。私は恥ずかしさのあまり、穴があいたら入りたい気持ちでした。同時に、ますます先生が好きになってしまいました。以後、私はすっかり先生の虜となってしまったように思います。先生はそれほど懐の深い人でした。

今でも、どこかで先生がああ包み込むような笑顔で私たちを見守っていて下さっているような気がしています。先生、ありがとうございました。どうか、いつまでも私たちを見守っていてください。

先生との思い出

若手 保彦

出来先生は、例会に顔を出さず、研究も遅々として進まない不真面目な私にも優しく接して下さいました。平成 22 年の秋田大会の後にお葉書をいただいたことがあります。そこには秋田での思い出と大会運営への感謝とともに、「年に 1 度は東京の例会でお目にかかりたいものです」というメッセージが綴られていました。研究に厳しい姿勢で臨まれている先生のことですから、本当は「年に 1 度」ではなくて「年に半分」のようにお書きになりたかったのではないかと想像すると、先生の心遣いにととても申し訳ない気持ちになったことを覚えています。

そんな先生のことと一番思い出されるのが、例会後の懇親会でお聞きしたことです。先生は、若い頃英語教育の研究者よりも歴史小説家を目指していたこと、またあたためている小説の構想があることをお話し下さいました。その小説の内容は、今となっては記憶があいまいですが、確か次のようなものだったと思います。モンゴルからチンギス・ハンがナポレオンやアレキサンダー大王と共に日本に侵攻してきた。これに対峙する日本は、源義経を総大将として、坂上田村麻呂や織田信長らが迎え撃つ……。私にはとても考えつかないような大きなスケールの設定に驚くと同時に、先生の想像力の豊かさに感嘆しました。

もう先生の小説を読ませていただくことは叶いません。天国でその小説を楽しみながら書かれていることを願うばかりです。

全国大会は 5 月に開催されます。今からでも奮ってご参加ください。
～第 33 回全国大会（福島大会）のご案内【続報】～

2017 年 5 月 20 日(土)・21 日(日)
日本大学工学部（福島県郡山市）

第 33 回全国大会については、3 月に京都で開催された理事会でプログラムを決定しました。土曜日には鳥飼玖美子先生の記念講演のほか 3 本の研究発表が、日曜日には 8 本の研究発表が予定されております。詳細は別紙をご覧ください。

みなさまとお目にかかれることを楽しみにいたしております。

)) 今からでもお申し込みいただけます

- ・発表の申し込みは締め切りでしたが、懇親会を含む全国大会への参加申し込みは今からでも間に合います。5 月 15 日（月）まで受け付けますので、以下のメールアドレスにご連絡ください。

33hiselt2017fukushima@gmail.com

1 月に会報とともにお届けしたはがきがお手元にある方はどうぞご投函ください(5 月 15 日必着)。その際、恐れ入りますがご自分で 52 円分の切手をお貼りください。

- ・懇親会は、完全予約制なので 5 月 15 日（月）までに申し込みをしてください。当日お申し込みになることはできません。予定が変わりご参加いただけなくなった方も 5 月 15 日（月）までに上記のメールアドレスか電話番号にご連絡ください。5 月 16 日以降に懇親会の参加をキャンセルされる場合はキャンセル料を申し受けます。

)) ご参加の際には必ずご一報ください

- ・大会当日は、受付で発表要旨集・学会誌・会員名簿・名札・領収証等をお渡しします。これらを準備する都合がありますので、全国大会にご参加の方は必ず事前にご一報くださるようお願いいたします。
- ・今回は、鳥飼玖美子先生による記念講演とサイン会が予定されているため、特に初日の受付は例年以上の混雑が予想されます。無用な混乱を避けるために大会実行委員会一同事前準備に努めますが、会員の皆様におかれましても、皆様の名札や領収証などを事前に準備できるようにするためにご協力いただけますよう、お願いいたします。

)) 参加費等は事前にご送金ください

- ・すでにお申し込みの方も新たに申し込まれる方も、大会に参加される方は次の費用のうち該当するものを合計し 5 月 12 日 (金) までに大会会計口座へご送金ください。お手数ですが、払込取扱票の通信欄に送金額の内訳をお書きください。

(1) 大会参加費：一般 2,000 円／学生 500 円 (2) 懇親会費：7,560 円 (税・サービス込)
 大会会計口座 【口座番号】00930-3-235138 【口座名義】拝田 清 (ハイダ キヨシ)
 * 学会会費の口座とは異なりますのでご注意ください。

◎ 発表予定者をお願い

- ・印刷版の発表資料をお持ちになる場合は、各自で 60 部をご用意ください。
- ・会場にプロジェクトは備え付けられています。共用のパソコンも用意してありますが、プレゼンテーション・ソフトで特殊なフォントやレイアウトをお使いの場合には、正しく表示されない場合に備えてご自分のパソコンをお持ちください。発表当日は、事前に動作確認をしてください。

◎ 大会関係の連絡先 (大会・懇親会への参加申し込み、申し込み事項の変更等)

大会実行委員長 川嶋正士

〒963-8642 福島県郡山市田村町徳定字中河原 1 日本大学工学部

電子メール：33hiselt2017fukushima@gmail.com

*まことに勝手ながら、お申し込みやお問い合わせには郵便または電子メールをご利用くださいますようお願い申し上げます。

◆ 宿泊について

宿泊をご予定の方は、各自でお早めにご予約ください。なお、以下の 3 施設については直接施設に電話して「日本英語教育史学会全国大会」とお伝えいただければ特別料金で宿泊できます。

- ・郡山ビューホテルアネックス (JR 郡山駅より徒歩約 5 分)

通常料金：12,960 円→特別割引料金：8,427 円 (朝食付き)

TEL：024-924-1111 [URL:http://www.k-viewhotel.jp/](http://www.k-viewhotel.jp/)

・郡山ビューホテル (JR 郡山駅より徒歩約 8 分)
通常料金：9,720 円→特別割引料金：6,656 円 (朝食付き)
TEL:024-939-1111 URL:<http://www.k-viewhotel.jp/>

・ホテルプリシード郡山 (JR 郡山駅より徒歩約 5 分)
通常料金：11,198 円→特別割引料金：9,178 円 (朝食付き)
通常料金：10,098 円→特別割引料金：8,078 円 (朝食なし)
TEL:024-925-3411 URL:<http://www.precede-k.co.jp/>

*いずれもホテルのウェブサイトや各種の宿泊サイトから手配されると特別割引は適用されません。

*早めに申し込む場合はこれよりお得な Web 割もあります。詳しくは上記 URL をご参照ください。

◆交通について

・鉄道をご利用の場合：

東北新幹線郡山駅下車。東京駅より郡山駅まで「やまびこ」で約 80 分。郡山駅を通過する新幹線もありますのでご注意ください。

・飛行機をご利用の場合：

福島空港より郡山駅までリムジンバスで約 40 分。

*郡山駅前から「徳定」行のバスで「日本大学」下車 (所要時間：約 20 分)。

*日本大学工学部のウェブサイトもご参照ください。 <http://www.ce.nihon-u.ac.jp/access/>

>> 事務局より

>> 2016 年度第 2 回定例理事会を開催

第 262 回研究例会に先立ち、2017 年 3 月 18 日(土)11 時より例会会場である「しんらん交流館」会議室 E において理事会が開催され、以下の件が話し合われました。

1. 第 33 回全国大会 (福島大会) のプログラムについて

→実行委員会の提案を受け確定しました。詳細は別紙の通りです。

2. 学会誌について

→学会誌発行の進捗状況について、編集委員長より報告を受けました。5 月の全国大会にあわせて刊行の予定です。

3. 投稿規程等の改正について

→投稿規程および標準書式の一部改正について、別紙の通り編集委員長より提案を受け承認しました。なお、標準書式については今後も引き続いて見直していきます。

4. 2016 年度会計について

→事務局より中間報告をしました。年度の会計は 3 月末で締め、会計監査を経て 5 月の会員総会で報告します。

5. 2017 年度年間計画について

→研究例会・理事会・論文審査委員会の日程については 1 月の理事会で決定しましたが、諸事情により日程および開催地を一部変更しました。10 ページをご覧ください。

6. 2017 年度以降の事務局体制について

→事務局長の異動にともない、学会事務局を広島県庄原市に移転します。9 ページをご覧ください。

7. その他

→会長より英語教育史重要文献の復刻計画について報告を受けました。

》》 名簿原票の返送について

会員台帳の情報を更新するため、この会報を発行する時期に合わせ、すべての会員のみなさまに「名簿原票」を郵送します。電子版会報の受け取りにご協力くださっているみなさまにもお送りしますので、必ず開封のうえご確認ください。締切までにご返送・ご返信いただいた分については、5 月の全国大会時に発行する「会員名簿」に反映させていただきます。

事務局移転等の事情により、今年も「名簿原票」の発送が遅れましたことをお詫び申し上げます。年度初めのお忙しい時期にお手を煩わせることとなり恐縮ですが、よろしくご協力ください。

なお、会費の未納分がある方には「会費納入のお願い」もしくは「会員継続のご案内」を同封させていただきます。会計処理の不手際により、事務局からのお願いが遅れたみなさまには、この場をお借りしてお詫び申し上げます。引き続きのご協力をお願い申し上げます。

》》 新年度の会費について

新年度の会費については、以下の要領でお納めくださいますようお願い申し上げます。

- [1] 全国大会に参加される場合大会当日、受付にてお納めください。領収証を用意してお待ちしております。その場で引き換えに新しい《学会誌》と《会員名簿》をお渡しいたします。
- [2] 全国大会に参加されない場合大会終了後、新しい《学会誌》と《会員名簿》を「ゆうメール」でお送りします。その際、新年度分の「会費納入のお願い」を同封いたしますので、よろしくご協力ください。なお、2016 年度までの会費が未納の方には《学会誌》と《会員名簿》はお送りせず「会費納入のお願い」のみを郵送させていただきます。

(文責：事務局)

◆ 事務局を移転します ◆

2017 年 4 月 1 日より事務局を以下に移転します。

〒727-0023 広島県庄原市七塚町 562

県立広島大学庄原キャンパス 河村和也研究室

Tel : 0824-74-1727 (研究室直通) Fax : 0824-74-0191 (総務課経由)

*お急ぎの際は携帯電話にご連絡ください。090-3437-1703 (河村和也)

*事務局のメールアドレスに変更はありません。membership@hiset.jp

)) 英語教育史フォルダ

- ◆ 河村和也・馬本勉・松岡博信・小篠敏明「明治～昭和期の英語教科書のリーダビリティ分析—女学校教科書を中心として—」『日本言語教育 ICT 学会研究紀要 第 4 号』(2017 年 3 月 15 日)

)) 新入会員

- ◆ 松尾 真太郎 (まつお しんたろう) 神奈川県 神奈川県立川和高等学校
- ◆ 浅野 貴文 (あさの たかふみ) 千葉県 東進衛星予備校

)) この先の研究例会・全国大会

- ◆ 第 33 回全国大会 2017 年 5 月 20 日 (土)・21 日 (日) 福島県郡山市で開催予定
- ◆ 第 263 回研究例会 2017 年 7 月 15 日 (土) 東京で開催予定
- ◆ 第 264 回研究例会 2017 年 9 月 9 日 (土) 広島で開催予定
- ◆ 第 265 回研究例会 2017 年 11 月 18 日 (土) 京都で開催予定
- ◆ 第 266 回研究例会 2018 年 1 月 20 日 (土) 東京で開催予定
- ◆ 第 267 回研究例会 2018 年 3 月 17 日 (土) 京都で開催予定

*3 月の理事会で 9 月例会の日程および 11 月例会の開催地を変更しました。また、3 月例会については開催地を確定しました。

*なお、今後も日程や場所に変更される場合があります。その際は会報およびウェブサイトでお知らせします。

研究例会での発表希望者は、(1) 発表希望月、(2) タイトル、(3) 発表概要 (100～200 字程度)、(4) 使用予定機器、以上の 4 点を明記の上、発表希望月の 3 ヶ月前の 10 日 (9 月発表希望であれば 6 月 10 日) までに日本英語教育史学会例会担当へお申し込みください。

Email: reikai@hiset.jp

EDITOR'S BOX 4 月に入ってそろそろ授業も始まった学校も多いことかと思えます。いろいろな雑務はあっても、3 月まではある程度自分のペースで研究や仕事を進めることができていたのが、4 月に入ると学生から様々な相談や外部の方との面会が入ってきて、なかなか思っているようにははかどらない日が増えてきました。ガイダンスなどで久しぶりに人前に出て話をしたりすると、後で疲れがどっと押し寄せてくることも、研究や仕事が順調に進まない原因になっています。/現在、5 月の全国大会での研究発表に向けて細々と準備をしているのですが、その中で『英語教育雑誌目次総覧』という本の存在に (恥を承知で告白しますが、本当に今さらながら) 気づきました。今まで重い雑誌の束を机に積み上げて一冊一冊めくって調べていたのが、その手間が省けてとても有難いと感じると同時に、さて一体どなたがこういうことを考えてくださったのだろうと編者の欄を見たら、監修に出来先生のお名前がありました。後輩の私たちのことを考えてこのような本を編集して下さっていたことを想像すると、改めて先生の心遣いに頭が下がります。同時に、もっと早くから調べていれば先生にこの本のお礼を直接伝えられたのという気持ちと、そういう偉大な先生からもっとお話を聴いて学んでおくのだったという後悔も感じています。(若)

◎ 日本英語教育史学会会報編集部 (秋田大学 若有研究室 geppo@hiset.jp)